

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
大学院生研究
2011年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院 21世紀社会デザイン研究科 比較組織ネットワーク学専攻		
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年		氏名
	21世紀社会デザイン研究科 比較組織ネットワーク学専攻 後期課程3年		嘉瀬井 恵子 印
指導教員	所属・職名		氏名
	21世紀社会デザイン研究科		萩原 なつ子 印
自然・人文・社会の別	自然 ・ 人文 ・ <input type="checkbox"/> 社会	個人・共同の別	<input type="checkbox"/> 個人 ・ 共同 1名
研究課題名	「思考と合意の社会学」千葉県・三番瀬の自然再生を事例として		
研究組織	在籍研究科・専攻・学年		氏名
研究期間	2011年度		
研究経費	200千円		

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は円卓会議における「合意形成」へのさまざまな評価や批判に対し、合意に至るプロセスや合意の含意を分析することを主要な目的とする。

特に、三番瀬再生計画検討会議とその後継組織である三番瀬再生会議の2つの事例を取り上げる。

合議の仕組みづくりや制度的な側面ではなく、会議における発話および発話をする上での基軸となる思考がどのように合意形成に影響を与えるのかについて、これまで見落とされがちであった個人の思考や動機付けが、合意の場面でどのように変容していくのかというプロセスを問い直すことにより、今後の合意形成における課題を見いだすことに資すると考えている。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[合意形成] [円卓会議] [ハビトゥス]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究のねらいは円卓会議における「合意形成」へのさまざまな評価や批判に対し、合意に至るプロセスや合意の含意を分析することにある。具体的には三番瀬再生計画検討会議と、その後継組織である三番瀬再生会議を対象とする。報告者の関心は合議の仕組みづくりや制度的な側面ではなく、会議における発話および発話をする上での基軸となる思考がどのように合意形成に影響を与えるのかについて、これまで見落とされがちであった個人の思考や動機付けが、合意の場面でどのように変容していくのかというプロセスを問い直すことにある。そこで本研究では、期間内において、以下の(A)事例研究、(B)理論研究を中心におこなった。

(A) 事例研究

円卓会議における合意形成を考察するにあたり、既に前年度までに三番瀬再生計画検討会議にける議事録を分析しており、期間内においては、その後継組織である①三番瀬再生会議を取り上げた。また比較事例として、円卓会議手法の先駆的事例である②成田空港問題円卓会議。原子力を題材に国家行政レベルでの議論をおこなった③原子力政策円卓会議——について主に議事録を用いて分析した。

① 三番瀬再生会議

この会議は多様な利害関係者が参加し、県による三番瀬の自然再生の政策において、計画の策定から実施、見直しの各段階で関わりを持つ。観念的な自然再生の議論を超え、まさに実践の真価を問うことを目的に設置された。

この合意形成プロセスからは、会議に参加した委員の発話は三番瀬に対して持っている姿勢や価値、性情やハビトゥスに基づいていることがわかる。一方、事業を実施する県に至っては、総合的に地域社会の現状を把握しておかなければならないが、「なぜ、住民参加で政策を考える必要があったのか」ということの振り返りが不足していた。

事業の策定段階から住民参加を重視したことは画期的である。しかし事業決定の根拠について重要なことは公共性ということ以上に、対等な合意に求めるべきだと言える。

② 成田空港問題円卓会議

従来の閉鎖的な空港行政の政策過程で内部にいた運輸省や公団と、外部に位置した反対同盟、あるいは政策構想を持つ民間団体が同じ土俵で議論した。合意に至った背景には、「歩み寄りの兆し」を着実に積み重ね、常に対等を意識した点が挙げられる。この合意形成プロセスからは、強制力をもつ側と反対同盟側との力の差が確認できた一方、その変化も把握できた。

③ 原子力政策円卓会議

この会議はもんじゅの事故を契機として国民的合意形成を目的として設置された。しかし、原子力の推進派は既存の原子力政策を前提にしており、いかに反対派に意見を容れさせるかに終始した。反目する両派が「立場」を乗り越えて議論することの困難さについて確認できた。また原子力という特殊な科学技術の矮小性を改めて認識した反面、未成熟な技術であるというアンビバレントな側面も同時に確認することが出来た。

⇒特に②、③に関し、議事録分析を通じ、円卓会議をめぐる合意形成プロセスにおける共通構造とその特質を抽出することが出来た。そのうち特に共通する円卓会議の設置の背景として、以下の3点あげる。

- 1) 戦後のグローバル化とともに経済の活性化のためにとった諸政策と現実との齟齬、従来型の議論の中心論者と市民との認識の乖離、市民による環境への関心の高まり等の要因。
- 2) 円卓会議手法が取り入れられる以前における公共政策、公共工事等の意思決定のあり方の変遷からは、意思決定や合意形成のあり方自体が変容し、実質的になってきた。
- 3) このような状況の変化から市民の意見を政策に取り入れることが望ましいとする考え方は社会に浸透し、市民を顧慮せずに議論をすることは困難な状態になってきた。

研究成果の概要 つづき

その結果、見えてきたこととしては、合意形成プロセスにとって必要な要件は、反目する立場の者が意見をぶつけ合うことではなく、互いのおかれている立場とその背景を認識し、自覚し、尊重し、止揚していくことである。そのプロセスを通じて互いの価値観が変容して合意に至ることである。

会議の中では人々は確信的な根拠による意思決定ではなく、自省性による歴史（特に構造化された社会の歴史）に支えられている。したがって個人の「ハビトゥス」を合意形成プロセスの中で尊重し合うことが重要である。そのためには“アトム化”した個人主義ではない、しなやかな絆で結ばれた新しいタイプの個人のあり様を模索していくべきである。

(B) 理論研究

上記のような着想から、円卓会議における三番瀬の自然再生議論を考察する上で、個人が環境思想をどのように獲得し、どのように行為へと移行していくのかをブルデューの「ハビトゥス」の概念を中心に分析を行った。

① 「ハビトゥス」と自然再生

桑子敏雄は合意形成について「自分がどうして賛成なのか、どうして反対なのかということを明確に意識していない場合が多いのです。それはその地域の環境との中で積み上げられたさまざまな空間の履歴ですけれども、そこで蓄積されたものによってその意見や立場が規定されている。ただそれを明確に自覚できているとは限らない」と考察する(桑子,2006,「社会的合意形成と風土の問題」『公共研究』3(2)114-122) またブルデューもハビトゥスの概念により、明確に意識しない行為の中で、人びとは自分の行為を実はコントロールして、自分の行為をできるだけ判断していることを考慮しなくてはならないということを論じている。個人が三番瀬の自然観として保持している理念や信念や態度は、意識せずとも「三番瀬のハビトゥス」から生み出されているのである。従って自分の意見を主張したり、なにがしかを表現するような議論の場に我が身が置いた場合、科学的に構築された客観的事実と自身の主観的な願望との間でも、委員は予め適応した心的傾向のハビトゥスにしたがった発話をし、考えられない事案を排除する、あるいは、あらゆる表現を自ずと承認する傾向を持つのである。

② 会議における複数の「ハビトゥス」の存在

三番瀬政策のさまざまな流れの中で、会議には趣の異なる複数の別様な形のハビトゥスが生成された。

ハビトゥスはブルデューが、「自己修正できるコンピューター・プログラム」(ブルデュー,1991,「社会学の社会学」藤原書店,171)と説明しているように、一度備わると永遠に持続するものではなく、むしろ周囲との関わりにより変化していく特性として存在している。すなわち一人の人間に複数のハビトゥスの変容が確認できるとともに、会議の中に客観化されている、三番瀬の意味感覚の再活性化をハビトゥスの変容から読み取れるということである。

そこで報告者が行ったインタビューでは、まず幼少期の家庭における「三番瀬あるいは自然との関わり方」という「第1次ハビトゥス」があり、次に三番瀬再生計画検討会議の経過とともに得られる「自然再生を目指す時の「再生」の考え方」である「第2次ハビトゥス」が存在し、さらに三番瀬再生会議に至り、「再生に向けたグランドデザインの考え方」という「第3次ハビトゥス」が存在する。つまり個人が会議と結びつきながら表出するハビトゥスは、総合的に同じものではなく、時の経過とともにハビトゥスはその都度、塗り替わり、会議で発話に影響を与えることがわかった。三番瀬の自然再生の議論では、異なるハビトゥスの向かい合いであるといえる。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

- ①-1 嘉瀬井恵子
「原子力政策円卓会議に関する一考察—合意形成プロセスの成果と課題—」
『21世紀社会デザイン研究』vol.10, 2011,p63-72
- ①-2 嘉瀬井恵子
「成田空港円卓会議に関する一考察—合意形成プロセスの成果と課題—」
『21世紀社会デザイン研究学会誌』vol.3, 2011,p 65-74
- ④-1 第6回21世紀社会デザイン研究学会
「成田空港問題円卓会議に関する一考察—合意形成プロセスの成果と課題—」
2011年12月4日,立教大学
- ④-2 環境社会学会
「原子力政策円卓会議に関する一考察—合意形成プロセスの成果と課題—」
2011年12月11日,関西学院大学